東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

小規模日本人学校における体育科指導と実際

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山中,秀人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173849

小規模日本人学校における体育科指導と実際

前サウジアラビア国ジッダ日本人学校　教諭
山形県鶴岡市立大山小学校　教諭　山　中　秀　人

キーワード：在外教育施設、ジッダ、灼熱の地、小規模、体育科教育

１．はじめに

本校の体育科の実施には、２つの困難がある。１つは、本校が灼熱の地であるサウジアラビア王国ジッダにあるという自然環境のことである。真夏の最高気温は50℃近くになり、冬でも40℃に迫る日が多い。もう１つは、屋内運動場がない、日本の教材が手に入りにくい中での、少人数による小学部低学年から中学部まで異学年構成での全校合同体育の実施という学習環境のことである。その２つの困難さを克服し、本校独自の特徴ある体育の実践を積極的に行いたい。また、その実践を保護者・日本人会の方にも紹介・啓発し、本校の学校教育への理解を深めていただきたいと考え、調査・研究することとした。（今回はその中でも少人数の方にスポットを当てた）

２．小学部低学年から中学部までの異学年構成、少人数による全校合同体育、屋内運動場なし、日本の教材入手困難という非常に厳しい学習環境に合わせた教科体育の実践

(1) 指導内容の工夫

①小学部低学年から中学部までのどの学年にも配慮した１時間の指導内容の工夫を行った。

本校の教科体育は、小学部低学年から中学部まで、異学年構成の全校体育を行っている。それは、新学習指導要領の柱にもあるアクティブラーニングにおいて、協同的な学びを促すためである。

しかし、各学年のねらいと内容には違いがある。小学部低学年の教科体育の内容としては、〇〇（運動）遊びとつく場合が多い。技などの技能に結びつく動きを遊びの中で身につけるねらいがある。それが、中学年や高学年、中学部となると〇〇運動と変化し、本格的な技能である技の習得を目指していく。特に、小学部低学年と中学部には、ねらいと内容に大きな隔たりがある。

その隔たりを埋めるために、どの学年にも配慮した１時間の指導内容の工夫を行った。具体的には、例えば、マット運動（遊び）において、前半には動物歩き競争などの折り返し運動の遊びを取り入れ、後半に技の習得を目指す時間を設けた。技の習得についても、ステップ方式（１～３）を採り、小学部低学年からでも取り組みやすいように工夫した。

ゲーム・ボール運動・球技に関しても、前半にはボール運動の動きにつながる鬼遊びを取り入れるなどして、小学部低学年から中学部までが一緒に活動できるようにした。

(2) 指導方法・指導形態の工夫

①学年の発達段階や体格・体力差、運動の経験を考慮して、指導方法や内容の違うグループを作成し、分けて指導した。

本校の教科体育は、全校体育が基本であるが、単元によっては学年の発達段階や体格・体力差、運動の経験を考慮して、指導方法や内容の違うグループを作成し分けて指導した。

具体的には、水遊び・浮く泳ぐ運動・水泳において、２グループを構成した。授業の最初は、全児童生徒で泳法などの技能習得につながるゲームを行い、その後、２グループに分かれて指導した。プールでの学習は、主に経験値によって差が出やすい単元であることから、グループごとにねらいと内容を変え、より児童生徒の実態やニーズに応えられるよう工夫した。その結果、一人ひとりそれぞれの伸びが見られた。また、２グループに分けることにより、指導者の目もさらに届くようになり、安全面の向上も見られた。

②学年の発達段階や体格・体力差、運動の経験を考慮して、ルールや場の工夫を行った。

本校は１学年の人数が最大でも４名、最少で１名と少ない。ゲーム・ボール運動・球技において試合を成立させるためには、ある程度人数が必要なため、全校児童生徒が一緒に行わなければならなかった。しかし、小学部低学年と中学部では、様々な面で大きな差がある。そこで、発達段階や体格・体力差、運動の経験を考慮して、その差を軽減するルールや場の工夫を提示したり、児童生徒と共に考えたりした。

平成27・28年度の水球では、高学年から中学部までが半数いたため、プール全面を使用して行った。本校のプールはいちばん最浅部で1.2m、最深部で２mで、全長20mの真ん中で傾斜がついている。その真ん中でコートを区切り、深い方を高学年以上、浅い方を中学年以下のプレイゾーンとし、行き来を禁止するルールを採った。そのルールにより、低学年と中学部の体格差をはじめとする大きな差を気にせず、プレイすることができた

平成29年度の水球では、中学部がいなく、高学年も少なかったことから、コートを半分にして、バスケットボールの３on３のように攻守の入れ替えでゲームを行うこととした。前年度までのように、コートを区切るわけではないため、低学年と高学年の対決の場面も見られる。そこで問題になるのは、やはり低学年と高学年の体格差をはじめとする差である。その差を埋めるために、ルールの工夫を児童生徒と考え、実践した。様々な工夫を試すことで、低学年でも高学年と一緒に楽しめるルールが見つかり、仲良くゲームを行うことができた。

ゴール型ゲームのセストボールでは、最初は小学部低学年から中学部まで、同じコート内でプレイさせた。水球同様に、やはり差が出たため、みんなでルールの工夫を考え実践した。ある程度みんなが楽しくゲームができるルールになったが、高学年以上が遠慮がちにプレイする姿も見られた。そこで、最後の方では、高学年以上の対決、中学年以下の対決と分けてゲームを行った。ただ、チームの連帯感をなくさないようにするため、同じチームの高学年以上の点数と中学年以下の点数を合わせて勝敗を決するようにした。そうすることで、高学年以上が対決しているときは中学年以下が応援するようになり、中学年以下が対決しているときには高学年以上がアドバイスするようになった。結果的に、最後にはそれぞれが思いっきりプレイを楽しむことができた。

ネット型ゲームでは、キャッチバレーの前にプレルボールを行い、中学年以下でもネット型ゲームに親しみやすく取り組めるようにした。プレルボールは、キャッチバレーをはじめとするバレーボールと違い、バウンドさせることができるため、中学年以下がネット型ゲームに慣れるよい教材になった。

③異学年グループ・チームを作成し、その中でお互いを見合ったり補助したりすることを通して、協力する機会を確保した。

前出の通り、本校は１学年の人数が少ないため、教科体育におけるグループやチーム分けは異学年を基本とした。

体つくりの運動では、グループ全員で、フラフープから誰一人として手を離さずに地面まで下ろすという運動を、みんなで協力し、タイミングをはかりながら行うことができた。

鉄棒運動においては、グループごとに技を見合い、よい動きをほめたり、アドバイスを送ったり、補助したりする姿が見られた。

ゴール型ゲームの水球やベースボール型ゲームのＴボールでは、みんなで話し合いながら、チームの力を高めるための練習をしたり、作戦を考えたりすることができた。

多くの場面で、上の学年は下の学年のよいお手本になり、下の学年は上の学年を真似たり、時には上の学年から教えてもらったりしていた。また、場合によっては、その立場が逆転することもあり、固定化された人間関係ではなく、みんなでめあてに向かって力を合わせていく動きが見られた。これは教科体育のみならず、本校の少人数集団という環境の下、日常的に行われているからこそのものだと考える。

(3) 教材・教具の工夫

①体育ノートを児童生徒一人ひとりに与え、教科体育の後に気づいたこと、考えたことなどのふり返りを書かせることによって学びの深まりがみられた。

一人ひとりに体育ノートを用意した。これには、教科体育1時間毎に、気づいたことや考えたことなどを書かせた。このノートを活用することは、毎回の教科体育の授業をふり返ることによって、本時のよかったところやうまくいかなかったところとその原因を分析し、次時に生かすというねらいがある。また、全体として困っていることがあれば、その解決策を書いてくるという課題を出すこともあった。時には自主的に、友達のよいところや、仲間へのアドバイスが書いてあることもあった。授業後の空いている時間の利用や宿題にすることにより、今日の授業についてじっくりと考えることができていた。よい記述に関しては、全体で紹介し、書くことの意欲につなげることができた。

体育ノートに、気づきや考えを書いて、自己分析、グループやチームの分析を冷静に行い、共有することで、学びの深まりも見られた。

②iPadやデジタルカメラ・ビデオカメラを活用し、運動の様子を撮影したものを見合うことによって、自分や友達のよさ、課題を客観的につかませることができた。

教科体育では、できるだけ運動の様子を写真やビデオに収めることにしている。また、本校では、多目的室と呼ばれている大きなテレビがある部屋で、全校児童生徒、全教職員が昼食を食べている。そこで、その日の教科体育で撮影した写真やビデオを見ることにしている。

水遊び・浮く泳ぐ運動・水泳、鉄棒をはじめとする器械器具を使っての運動遊び・器械運動、走跳の運動遊び・陸上運動では、自分や友達の動きを、ゲーム・ボール運動・球技では、自分の動きやチームとしての動きを客観的に見ることによって、良さや課題に視覚的に気づくことができた。また、その気づきを、前出の体育ノートに記載することもでき、次時の学習に効果的に活かすことができた。

③自分の力に応じて選択できる検定カードを準備し、継続的に活用させることにより、運動に進んで取り組もうとする意欲を引き出した。(水泳検定・鉄棒検定・なわとび検定)

水泳、鉄棒運動、なわとびに関しては、検定カードを準備し、積極的に取り組もうとする意欲を引き出した。

水泳検定カードは、水に入って走るという低学年を意識したものから、高学年以上を意識した4泳法全てを行う個人メドレーまで、20の段級を設定し、より高い段級を目指して、プールでの授業に励むことを目的としたカードである。

本校児童生徒は、毎年5か月間、プールでの授業を行う。その最後に検定認定の授業を数時間設け、認定を行う。検定の段級は、より多くの泳法を身につけた方、より速く泳げた方が高いので、それまでの授業の間、子ども達は一生懸命プールでの学習に取り組む姿が見られる。(新しい泳法を身につける、より速く泳げるようにダッシュに取り組むなど) また毎年、検定の記録を残していることもあり、去年の自分よりいい段級を目指そうとし、それがまた意欲を高めていることにも繋がっている。

鉄棒検定カードは、上がり技、ぶら下がり技、ふり技、位置変え技、向き変え技、回り技、下り技を組み合わせ、初級から中級技を集めたものをこあらコース、中級から上級技を集めたものをおさるコースとした。3つの技ができる毎に1つ段級が上がるようにし、20の段級を設定した。

鉄棒検定カードの特徴として、系統性の表記がある。同じ色のマークをつけた技は、同じ系統の技となっており、初級の技から取り組むことで、同系統の上級技ができるようになることを示している。それにより、できるようになりたい技のために、どの技に取り組めばいいのかを、児童生徒自身が考えるようになった。

なわとび検定カードは、前回し系の技、後ろ回し系の技等を組み合わせ、跳んだ連続回数が指定数伸びる毎に段級が上がるカードとした。主に低学年を意識し、基本的な技の取り組みを促すカードとしてカエルコース

（段級関係なし）、初級から中級技をちりばめたカードとしてウサギコース（10～１級）、中級から上級技をちりばめたカードとしてカンガルーコース（初段～神様）の全20段級を設定した。

なわとび検定カードの特徴は、次の３つである。１つ目は、ただの前回し跳びでもステップを変えるなどして、技のバリエーションを増やしたことである。それにより、様々な動きとなわ回しが同時にできるようになった。２つ目は、得意な一部の技だけの回数が伸びていかないように、段級を上げるためには複数の技の回数を増やさなければならないようにしたことである。これにより児童生徒は偏りなく、様々な技に挑戦するようになった。３つ目は、前回し系の技、後ろ回し系の技に加え、２人跳びの技をカードに取り入れたことである。これにより、段級を上げるためには友達と跳ぶ必要があり、積極的な関わりをもつことを促すことに繋がった。

④現地で入手困難な教材は、現地で手に入るものや既に校内にあるものを組み合わせて自作し活用した。（ゲームやボール運動・球技のネット型ゲームであるプレルボール・キャッチバレー／ベースボール型のＴボール）

現地では、日本の使いやすい教材が手に入らず、財団の教材斡旋や教材整備事業を利用させていただくことにも限度があるため、足りない教材に関しては、現地のものを代用したり、手作りで作ったりした。

プレルボールでは、現地で購入したコーンと体操棒をビニール紐で繋ぎ、ネットの代わりとした。また、その後、発展ゲームとして行ったキャッチバレーでは、以前日本から購入したネットを使用した。しかし、人数の割に幅が足りなかったので、元々学校にあった現地で購入したであろう高跳びの支柱のようなものに棒を括りつけ、ネットと繋いだ。下には、プレルボールでも使用したコーンと体操棒を設置した。

また、Ｔボールでは、低学年に合う高さのＴボールがなかったため、現地で購入したコーンを代用した。破損防止のため、ガムテープで補強するなどの工夫も行った。

（4）体育的行事との連携

①運動会で披露する表現運動（表現・リズム遊び）では、教科体育で身につけた鉄棒やマットやなわとびの技を取り入れ、日常の授業の成果を生かした発表になるようにした。

本校では、運動会の種目で表現をすることが伝統になっている。以前の表現を見てみると、組み体操やソーラン節など、日本の小中学校でよく見られるようなものを実施しているようであった。私は、行事のための表現ではなく、日常の教科体育を活かして、表現に取り入れようと思い、実践することとした。その良さとしては２つ挙げられる。１つは、教科体育と組み合わせることで、どの学校でも真似できないオリジナリティ溢れる表現ができるということである。もう１つは、運動会の表現で披露することにより、保護者の方々をはじめ、日本人会の皆様に、日常の教科体育をご覧いただける絶好のチャンスだということである。児童生徒にとっても、披露する場が大きければ大きいほど、日頃の教科体育に益々熱が入ることにもなると考えた。

平成27年度は、ダンスとマット運動を融合させた表現を披露した。テーマは「日本の心」。サウジアラビアに住む日本人として、日本の心を忘れないよう、そして、それを見に来てくださる方々に伝えよう、というねらいを共有して行った。曲も、三味線とロックを融合したものを使用し、雰囲気を作った。

取り組みとして、「ダンス構成シート」を作成し、グループ毎に使用させた。４×４＝16拍を１つのまとまりとして、曲調に合ったイメージを共有させ、動きを考えさせた。また、他のグループがダンスを行っている間に披露するマット運動の技も考えさせた。グループ毎に、技の種類、面の使い方、タイミングなどを考慮して、構成を考えさせた。

平成28年度は、ダンスとなわとびを融合させた表現を披露した。テーマは「輝け命！～Challenge the Life～」。命の尊さについてみんなで学び、今ある自分達の命をみんなで思いっきり爆発させようと確認し合った。曲も、命の輝きをテーマにした日本のPOPミュージックにした。

取り組みとして、「ダンスのアイディアを考えよう！」というシートを作成し、グループ毎に使用させた。

本年度は、曲の歌詞の意味をかみしめ、それに合ったダンスを考えさせて練習させた。また、なわとびに関しては、長なわとびでは8の字とび、十字とび、ダブルダッチを、短なわとびでは自分の得意技、集団とびを練習させ、完成度を高めていった。また、短なわとびの準備運動であるなわ回しも美しく見えるように構成し、表現に活用した。運動会で披露するという場があったことで、休み時間まで進んで練習する姿も見られるようになり、「なわとび検定カード」への取り組みも意欲的に行わせることができた。

平成29年度は、ダンスと鉄棒運動を融合させた表現を披露した。テーマは「仲間と共に夢に向かってLet's think Let's challenge」。体育で大切にしている挑戦・協力・考えるは夢に繋がっている、夢に向かってがんばろう、という思いを表現しようとした。曲は、夢に向かって冒険するイメージの曲を選んだ。

取り組みとして、前年度同様に、「ダンスのアイディアを考えよう！」というシートを使用した。また、「鉄棒技の構成を考えよう！」というシートも作成し、グループ毎に使用させた。そのプリントで、同系統の技を、同時またはシンクロさせて披露する相談をグループ毎に行わせ、練習させた。

どの年度も、児童生徒が工夫を凝らし、努力した積み重ねが見られ、思いが伝わる、すばらしい表現になったと思う。見ている方々からも拍手喝采を浴びることができた。